

職業的周縁的位置におかれる人々の尊厳と承認をめぐる —清掃労働者との交流授業、その成果と課題—

About Dignity and Recognition of the Occupational Minority People: The Result and the Problem of the Interactive Class between Cleaning Workers and University Students

井沢 泰樹

Yasuki IZAWA

はじめに

日本にも職業差別がある。職業差別とは「職業の種類によって、それに従事する人々とその家族構成員の価値を判定し、自分より下位にあると思う人間を差別すること」である。

東京都および東京23区の職員の職種の中には「特別現業職」とよばれるカテゴリーの職種がある。すなわちそれは、食肉のためのと畜解体をおこなう仕事、火葬場における仕事、飼われなくなったペットなどの保護・殺処分等などにあたる動物愛護センターの仕事、事件事故における死体解剖にあたる監察医務院の仕事、そして清掃労働である。これらの職業は社会になくてはならない仕事であるにもかかわらず、一方で社会的蔑視の対象となることが多い。

筆者はこれらのなかで清掃労働を取り上げ、担当する授業において「職業差別と清掃労働」の問題を、東京都の清掃労働者の方々をお招きしてお話をうかがい、私たちの職業観を問い直す取り組みを進めてきた。本稿はその成果と課題をまとめたものである。

1. 東京都における清掃事業の歴史と現状

江戸時代、江戸に人口が集中し、空き地や川、堀へのごみ投棄が問題となる。1649年、幕府が「会所地」（空き地）へのごみ投棄を禁止する。1655年、幕府が深川永大浦（現在の江東区）をごみの投棄場に指定する。1900年、日本初のごみに関する法律「汚物掃除法」が制定され、ごみ処理（収集・処分）が、自治体の責務となる。1924年、東京初のごみ焼却場「大崎塵芥焼却場」（荏原郡大崎町営）が完成する。1930年、汚物掃除法等の改正により、ごみの焼却処理が自治体の責務となる。その後、戦争によりごみの収集作業が停止される。1946年、ごみの収集作業が再開される。1956年、東京清掃局が設立される。1961年、ごみ容器（ポリバケツ）による定時混合収集作業が開始される。1970

年、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」が制定される。1971年、東京都知事が「ごみ戦争」を宣言する。「ごみ戦争」とは以下のことを指す。高度経済成長を経て、大量生産・大量消費・大量廃棄の時代をむかえ、ごみ量が爆発的に増加し、ごみ質も多様化した。昭和40年代には、清掃工場の処理能力を上回るごみが発生し続け、生ごみの一部も焼却処理されずに埋め立てられていた。悪臭、ハエの大量発生などが埋立地周辺住民の生活をおびやかすなど、ごみ問題が深刻化する。1971年、当時の美濃部都知事が「ごみ戦争」を宣言し、ごみ問題の解決に向け、新たな清掃工場の建設に真剣に取り組む決意を表明した、というものである。

そして1973年、プラスチックを不燃ごみとして分別収集するようになる。1979年、粗大ごみ破砕処理施設が完成する。1989年、ごみ減量キャンペーン「TOKYO SLIM」が展開される。1981年、粗大ごみの収集手数料が全面有料化となる。1993年、半透明のごみ袋（東京都推奨袋）によるごみの出し方ヘルールを変更する。1996年、事業系ごみが全面有料化となる。1997年、江戸川清掃工場・京浜島不燃ごみ処理センター等の完成により、可燃・不燃・粗大すべての中間処理体制が整う。ごみ集積場を使った資源回収のモデルを実施する。ペットボトルの店頭回収事業が開始される。1999年、ごみ集積場を使った資源回収を本格導入する。2000年、清掃事業が東京都から東京23区へ移管される。ごみ減量・リサイクルの主体が23区への移行することになる。中間処理を共同で行うため清掃一組が設立される。2003年、23区の区長会が、3 清掃工場（新宿・中野・荒川）の建設計画取りやめを決定する。2006年、廃プラスチックサーマルリサイクル（容器包装プラスチック等資源化促進と廃棄プラスチック分別変更）のモデル実施が開始される。

2. 職業に貴賤はないか？

清掃労働は言うまでもなく私たちの生活になくてはならない仕事である。清掃労働をしてくれる人たちがいるからこそ、私たちは衛生的な社会生活をおくることができている。しかしにもかかわらず、清掃労働は往々にして社会的差別・蔑視をうける職業でもある。学生たちにも、清掃労働に積極的に就きたいかと問えば、肯定的な答えは返って来ない。

清掃労働者の仕事は過酷である。毎年、正月休みと盆休みの時期にはアルバイトを雇って少し長期の休暇を確保している。その間に家庭サービスをしたり、自らの疲れた体を休める。清掃労働者にとって腰痛は深刻な職業病だ。

かつては、そうした正月休みと盆休みのアルバイトに多くの大学生の応募が殺到した。時給がいいからだ。一日働けば1万円ちかくもらえる。大学生はそうやって生活費やこづかいを稼いだものだった。

しかし、今は日本人の大学生はほとんど来ないという。最近の大学生のアルバイト先といえばコンビニエンスストアや飲食店が主であり、「きつい」「汚い」「危険」の「3K」の仕事には、ほんとうに来なくなった、と清掃労働者は嘆く。

その空白となった若年労働の枠を補っているのが外国人留学生たちである。「彼らはまじめだ」と

ある労働者は言う。「どんな汚いきつい仕事でも一所懸命やる。以前の日本の学生もそうだったんだけど・・・」。「ただ、留学生で支障があるとすれば言葉の問題だ。ぶっちゃけて言えば、おれたちちゃんと人であっても、仕事さえまじめにやってくれればいいんだが、言葉の心配はやっぱりあるんだ。おれたちの仕事は大声でおたがいに合図をしあわなければいけない。そうしないと、パッカー車の機械のスイッチをいれてはいけないときにいれてしまっただ事故につながることもある。それでパッカー車に巻き込まれて命を落とした仲間もいた。だから、こっちが言った合図がきっちり伝わっているかどうかはほんとに大事なんだ。だからできれば言葉の通じやすい人が来てくれた方がありがたいというのが本音だ。」

東京清掃労働組合・人権交流会の方々の話はとても興味深いものであった。日常生活の中で、「ごみ集めのおじさん」としか彼らを捉えてこなかった筆者にとって、この仕事に就くまでの経緯、その一人一人の経験、その生きざまは、「清掃労働者」というカテゴリーにはおさまらない多様性があった。ある意味、それは当然のことと言える。たまたま今、清掃労働という仕事をしている彼らには、そこに到着するまでのさまざまな人生があったのである。それは誰しも同様である。しかし私たちはそれを知らないし、それを見ようとはしない。筆者はこの清掃労働者の話を学生に聞かせたいと考えた。

現代の大学にとって、学生のキャリア形成支援は社会的要請である。学生の進路選択や就職の問題は、単なる「自己責任」で済まされない状況がある。筆者もそうした社会的要請の中、学生たちのキャリア形成について、よりよい機会の提供を学生たちにできればと心を砕いているつもりである。

しかしそこには大きなジレンマがある。学生たちが就きたい職業の多くは、マスコミ、出版、流通、金融といった社会のいわば「メインストリーム」の職業である。それは、その裏返しとして、たとえば清掃労働のように、社会には不可欠な仕事であるにもかかわらず差別や蔑視をうけ、社会のいわば「周縁的位置」におかれる職業について、「こういう仕事に就かないために皆さんがんばりましょう」といった暗黙のメッセージを学生に送ることにはなっていないか？ 実際、お話をうかがったある清掃労働者はかつて自分が経験したこととして、業務に携わっている自分たちを遠くの方で見ていた、ある母親が傍らにいた子どもに、「しっかり勉強しないと、ああいう仕事をするようになるのよ」と諭している声を耳にしている。このとき彼は、「とても屈辱的な気持ちを味わった」と述べている。「職業に貴賤はない」と言いながら、学生に対する自らの働きかけが、こうした特定の職業に対する差別や蔑視の再生産に加担することになっており、そうした「職業選別」を自らおこなうことになっているのではないか、そうしたジレンマである。

大きな組織に入って、「あなたの代わりは他にもいるんだよ」と言われる人生と、きつく苦しい仕事だが、「あなたがいるからこの場は成り立っているんだよ」と言ってもらえる仕事の、いったいどちらが学生にとっては幸せなのか？ あなたたちが社会に出るときに見えている職業・進路選択の幅は、あなたの目の前の30°から60°の範囲でしかない。もっといろいろな選択肢の幅の中からあなたの進路選択をしてみてもはどうだろうか？ いろいろな職業や、いろいろな職業に就いている人たちの思いや

生きざまを知ることも、今後のあなたたちの人生を構想する上で有意義だともう。そうした意図のもと2008年度より、担当する授業「社会文化計画論」「社会文化運動論」に東京都の清掃労働者の方々をお招きしてお話をうかがうことにした。

3. 「清掃労働」に対する学生の意識調査

清掃労働者の方々の話をうかがうにあたって、学生たちは「清掃労働」に対してどのような意識を持っているのかを事前に調査した。

実施日：2010年6月18日（金）「社会文化運動論」授業時

回答者数：207名

質問項目と結果は以下のとおりである。

Q 1 あなたは清掃労働の仕事に積極的に就きたいですか？

1. 積極的に就きたい・・・6名
 2. やや積極的に就きたい・・・3名
 3. どちらでもない・・・90名
 4. 積極的には就きたくない・・・51名
 5. 就きたくない・・・48名
- 無回答・・・9名

S Q 1 上の質問で「1」「2」を回答された方、その理由は何ですか？

- ・親類が清掃業をしているから。アルバイトしたことがあるが、周囲がイメージしているほどきついわけではない。
- ・小学生のころ、職業について調べる授業があり、その時、ゴミ収集車の仕事を調べました。その時は調べ方があさかったせいもあるのですが、朝はかなり早い仕事だけど、昼過ぎには収集車の清掃をしてほぼ仕事が終わるという記述を、「なんて素敵な仕事なんだ」と思った記憶があります。今、就きたいかはわかりませんが、とりあえずまったく偏見は持っていないつもりです。
- ・社会生活において誰かが就くことで、あるいは清掃の仕事に就くことで安定した社会になるという意義があるとも思うから。

S Q 2 上の質問で「4」「5」と答えた方、その理由は何ですか？

- ・人体に影響を及ぼす菌にふれてしまうかもしれないから。他人が汚した物に近づきたくないから。
- ・良いイメージがまったくない。汚い。臭い。
- ・手が汚れるのがすごく苦手だからです。電車のつり革などを触るのもいやで、触ったらすぐ手を

洗いたくなってしまうので・・・

- ・生産的な仕事をしたい。
- ・お金がなかったら働かないといけませんが、自分が汚れているようなイメージを持つので嫌だ。
- ・就きたい仕事ではない。
- ・不潔だから。他人のゴミを処理するなどイヤだ。
- ・私はアルバイトで少し清掃もしていますが、それを中心とした仕事には就きたくないから。
- ・素晴らしい仕事だとおもうが自分がゴミをさわりたくないから。

Q 2 もし、あなたとつきあっている人が清掃の仕事をしていたらあなたはどうしますか？

- ① なんとも思わない・・・159名
- ② 立派な職業だとおもう・・・21名
- ③ 私は気にしないが親や兄弟姉妹には言わない・・・12名
- ④ 仕事を変えてほしい・・・6名
- 無回答・・・9名

S Q 上の質問で④と回答した人はなぜそう思いますか？

- ・誰も就きたがらない仕事だから
- ・立派な仕事で誰もができることではないと思うが、親しい人がやっているのはよく思えない。

Q 3 あなたは清掃の仕事をしている人を、自分の結婚相手として選びますか？

- ① 選ぶ・・・129名
- ② 選ばない・・・51名
- 無回答・・・27名

S Q 1 上の質問で①と回答した人はなぜそう思いますか？

- ・結婚したいとおもう相手が清掃の仕事をしていたら選ぶ。
- ・最終的にはその人の性格などで決定すると思うので、特に清掃の仕事であることが結婚の最終的な判断基準にはならない。
- ・清掃の仕事をしている人と結婚したいとは思わないが、自分の好きな相手がその仕事に就いているなら結婚するとおもう。

S Q 2 上の質問で②と回答した人はなぜそう思いますか？

- ・収入が低いイメージがあり安定していないのは嫌だから。
- ・あまり立派とはいえない仕事というイメージがある。

- ・好んではえられない。
- ・単純に、将来安定した生活を送るには、安定した仕事に就いている人と結婚したい。しかし本当に好きなら考える。
- ・給料が少ないイメージだから。
- ・進んで選ぶとはしません。
- ・相性が合うとは思えないから。
- ・「この仕事はイヤ」というのはないとおもいますが、心の葛藤があるとおもいます。

質問1では「清掃労働に積極的に就きたい」「やや積極的に就きたい」をあわせて全体の4.4%で、「どちらでもない」は44%、「積極的に就きたくない」「就きたくない」をあわせて48%という結果であった。積極的に就きたい理由として、「周囲がイメージしているほどきつい仕事ではない」「昼過ぎにはほぼ仕事が終わる」といった「楽な仕事」というイメージがあるようだが、これは、そうした労働内容、労働時間の日もある、と考える方が妥当であろう。

「就きたくない」という理由として、「汚い」「臭い」「不潔」といった表現が目立つ。また「自分が汚れているようなイメージを持つので嫌だ」というように、職業が自己の人格や自己イメージに影響をあたえていることがうかがえる回答もある。また、「生産的ではない」という答えがあるが、清掃事業を「ゴミ処理」「終末処理」と捉えるのではなく、「持続可能な社会の発展」を視野に入れた、「リサイクル事業」「再資源化事業」と視点を提起していくことの必要性を感じるころである。

質問2については、「なんとも思わない」が全体の76.8%、「立派な仕事だともう」が10.1%であるが、「私は気にしないが親や兄弟姉妹には言わない」が5.8%、「仕事を変えてほしい」が2.9%という回答が少数ではあるが見られる。

若い世代の未婚の清掃労働者にとって結婚問題は大きな課題である。最近は状況が変わってきたとはいえ、以前であれば、家族や親族にも清掃の仕事をしていることをずっと言わずに生活しつづけていた人も少なくはなかったという。彼らはその代わりに、「公務員だ」と言って自分の仕事を“濁さざる”をえなかった。それほど社会には清掃労働に対する差別意識が強く残っていたのである。

清掃労働に就く前に既に結婚をしていた人は別であるが、若くして未婚で清掃労働に携わった人の場合、「なかなか相手が見つかりにくい」ということを聞き取りのなかである労働者の方が語っておられた。質問3では、自分の結婚相手として清掃労働者を、「選ぶ」が全体の62.3%、「選ばない」が24.6%であった。また、「無回答」も13.0%と多い数字であった。

「選ぶ」理由は、「職業ではなく人物だから」といったことであり、「選ばない」理由の中では「収入が少ない」「不安定である」といったイメージがあるようである。自治体の清掃労働者は言うまでもなく公務員である。そうした意味では“安定した仕事”である。民間の清掃事業業者は自治体労働者ほど安定はしていないであろうが、好景気/不景気に雇用者が左右されるように、清掃労働者がことさら不安定であるというわけではなく、この「清掃の仕事=低収入・不安定」というのは偏見と

言わざるをえない。

4. 清掃労働者の方々を招いての交流授業

「交流授業」というネーミングは清掃労働者の方々の希望に依る。それは「自分たちからの一方的な話だけではなく、ぜひ学生のみなさんの考えや意見も聞きたい」という意図であった。

2008年度から2010年度の3年にわたって、「社会文化計画論」（2008年度をもって閉講）「社会文化運動論」に足をお運びいただいた。その概要は以下のとおりである。

（1）2008年度 交流授業

「社会文化計画論」の1コマを使っておこなった。このときは5名の清掃労働者の方にお越しいただき、東京都における清掃労働の歴史、清掃労働の現状を3人のスピーカーにお話しいただいた。

（2）2009年度 交流授業

「社会文化運動論」の1コマを使って、講演会「部落差別と職業差別に抗して」（担当：Iさん）をおこなった。

Iさんは65歳（当時）。東京都下のある被差別部落の出身であり、数年前まで東京都の清掃職員をされていた。また、Iさんは長年、東京都清掃労働組合・清掃人権交流会の会長を務められている。

（3）2010年度 交流授業

2010年度の交流授業は、「差別と向き合って生きる－清掃労働者からの提言」というテーマで4週にわたって詳しく扱った。

第1週 事前学習「清掃労働とはどういう仕事か？」と「清掃労働」に対する学生の意識調査
NHKドキュメンタリー番組『72時間：年始めゴミ収集大作戦』（2007年2月放映）の視聴と文献資料により、東京都における清掃労働の現状について講義をおこなった。また、あわせて「清掃労働」に対する学生の意識調査をおこなった。（担当：井沢）

第2週 テーマ「清掃リサイクル事業ってどんな仕事？」

- ① 「東京23区の清掃事業の歴史」（担当：Oさん）
- ② 「清掃事業における収集の仕事」（担当：Hさん）
- ③ 「清掃事業における運搬の仕事」（担当：Fさん）
- ④ 「清掃工場における仕事」（担当：Uさん）

第3週 テーマ「清掃・リサイクル事業の現場で働いて」

- ① 「清掃職場で働くこと過去と今の自分」（担当：Nさん）
- ② 「清掃職場で女性が働くこと」（担当：Tさん）
- ③ 「環境学習、そして『ふれあい作業』とは」（担当：Rさん）

第4週 テーマ「清掃という仕事への差別と現実」

- ① 「職場での差別に抗して」(担当: I さん)
- ② 「差別と向き合って変わったものは」(担当: S さん)
- ③ 「下請の現状－葛飾・足立清掃工場差別落書き事件を受けて」(担当: E さん)

5. 清掃労働者の方々の講演内容

清掃労働者の方々、数人の話の抜粋を以下に掲載する。

(1) I さん(東京都清掃労働組合・清掃人権交流会会長)

部落差別の経験

清掃人権交流会の会長の I です。H 市の部落の生まれです。北条氏の出城八玉垂子城があった拠に部落はあったと言われています。明治の初めころ、宣教師が H に来て、小さな教会ができました。神の下で自由平等ということで私の部落の人たちが 90% 以上の人が寺から教会に改宗したそうです。今も部落の真ん中に立派な教会が建っています。私の部落の産業としては、狐、狸、テン、イタチ等の毛皮のなめしをしたり、草履表、座敷簾などを作っていました。その他、経木(木を薄く削ったもので、包装に使った)と同じように使う竹の皮を作ったり、靴も作っていた。

各地区に消防団があつて部落にもあつた。火事があつて出動したあと振舞酒が出た。それを茶碗で飲み帰ってくる。帰った後、部落の人が飲んだ茶碗は二度と使えないように全部割られた、という話をよく聞いた。我々の時代は酒を貰って自分の消防小屋へ帰ってきてから飲むようになった。酒が入るとよく喧嘩になるが、けんかした時は相手の顔と名前を覚えて酒が入ってない時、ちゃんと後始末に行け、と親がよく言っていた。酒を飲んでいるときにやると、差別ではなくノンベエのケンカで終わってしまう。素面でいけば相手も真剣に聞く。昔は地域の運動会があつた。消防団対抗意識もあつた。マラソンとリレーでは 3 位以下になったことはなかった。1 位になれば必ず相手は敬う。一生懸命にやっているから強いんだと。何もしなくて負けたのなら「やっぱり部落の人間だ」と思われてしまう。だから決して負けたくない。町会は負けても消防団は絶対負けなかった。今、私の部落は 1/4 ほどが残っていてあとの 3/4 は新しく越してきた人となっている。

職場の差別事件

1995 年、千歳清掃事業所という清掃車の車庫がありました。そこで私に対する差別事件が発生しました。「キチガイヤロウブラクヘカエレアサハラ」という無記名のメモが私の文書箱(レターケース)に入っていました。「これは何だ! 許せない!」と労働組合と事務所の所長に言いました。私は職場ではっきりと意見を言う方だったので、あいつを黙らせろ、という意味ではなかったかと思います。部落解放同盟東京都連、東京都の同和対策部、清掃局、東京清掃労働組合とで確認会、糾弾会がもたれ、問題の確認と、反省、今後の対策について行政や労働組合の姿勢が正されました。解放同盟

の支部長をしていた親の背中を見ていたので、やって来られたと思います。自分が気が弱かったり、人前で話をしたり出来なかったりしたら、職場をやめるような状況に置かれたかも知れません。部落の人や職場の仲間、支えてくれる人がいたから働き続けられたと思っています。

清掃人権交流会

事件後3年目に清掃人権交流会を立ち上げました。清掃人権交流会は、私の地元の部落をはじめ東京下の部落フィールドワークに行き、清瀬にある全生園でハンセン病元患者の人とも話した。すごく明るいです。あの裁判に勝った後は。勝つまでは悲しい顔をしていた。ハンセン病差別であそこから出られない。品川にある芝浦と場は、豚や牛を解体し食肉として市場に出す所で、見学したあと職場の人たちと交流しています。と場は、牛殺し、豚殺しという差別の葉書や封書が来ます。その肉を食べているのは私たちです。差別される筋合いはあるのか。そんな思いから、私たちは差別に正面から向き合うと場の人たちと交流しています。何で部落の人たちは差別を受けなくてはならないのか。生まれた所だけで差別されるというのは何なんだと思います。

清掃現場での差別

清掃の職場にはたくさんあります。清掃車のそばを通るときこう鼻をつまんでいく。確かに生ごみは臭い。その時言うんですよ。子どもたちに。「臭いを出したのはどこの誰？」って。すると子どもは「うちのお母さんです」と。「あんたたちが御飯残したり、おかず残したりするからこういうのがでるんですよ」と子どもに言います。おばあちゃんは子どもに向かって「勉強しないとああいうおじさんになる」と指さすんです。これも差別です。清掃車が狭い道に入って行くと乗用車と鉢合わせします。乗用車は後ろが見えますが清掃車は見えない。作業員が誘導してかなりバックをしなければならぬ。それで乗用車の方に「そこに駐車場があるのでそこに除けてくれませんか」と言っても除けてくれない。それで仕方なくこちらが下がる。後で区役所に通報が来る。「清掃車に脅かされた」と。私たちが一生懸命無理して下がってもそういう区への通報を散々もらった。区役所から電話がきて、「注意」となり、「注意」が重なると「始末書」となる。そんなことが散々あった。でもこれは仕事で公務なんですよ。何もそんなに私たちがいじける必要はないんです。あまりひどい時は怒鳴りたくなる。でも我々は差別を受けてきたから怒鳴られることはあってもこちらから怒鳴ることはしない。以前は清掃労働者12,000人のうち一割が部落出身者と言われていました。現在は清掃労働者は約6,000人、一割として600人いる。まだまだ差別が起きている。どんなに一生懸命やってきてもなくなる。差別は自分の心にある。誰にでもある。それが表に出るか出ないかの違い。差別はいけないと、何の差別でも、差別はいけなときちゃんと自分に向き合ってください。私の言いたいことはそれだけです。

(2) Oさん(男性、千代田区千代田清掃事務所勤務、東京清掃人権交流会事務局長)

3年前、私はインドの清掃労働者と交流してきたが、カースト制度の厳しい差別の中で彼らは最底辺に置かれ、安全用具など何もない素手でごみの収集やし尿の処理をしていた。ほとんど機械化もされていない姿は、昭和30年代までの私たち日本の清掃労働者と変わらない姿であった。「くさい」「汚い」と侮蔑され、「捨てるものだから価値がない仕事」と差別されてきた私たちの原点を、あらためて突きつけられた思いであった。

今、私たちは、公務員の中でも最も深く住民と接し、住民と結びついた環境の守り手として日々仕事に励んでいる。お年寄りや体の不自由な方を援助する「ふれあい収集」や子どもたちへの環境学習などにも積極的に取り組んでいる。清掃事業は環境を守り持続可能な社会を実現していくための欠くことのできない重要な仕事である。私たちの担う清掃労働は社会的に正当に認められなければなりません。仕事への蔑視や差別は許せないし、清掃労働を軽視して切り捨てようとする国や自治体の動きも大きく転換させなければならない。

(3) Hさん(男性、千代田区千代田清掃事務所勤務)

大変なのは特に夏の作業です。炎天下、熱中症の危険がいつもあります。アスファルト上での作業は40度以上。作業を終えると2kg位は体重が落ちてしまいます。また年末年始期間は年間で一番のごみ量となり、大変な苦労をして処理をしています。圧縮されたスプレー缶などが原因の車両火災もあちこちで起きており、火災予防にも細心の注意を払って作業しているのです。繁華街周辺では朝多くの通勤客がすり抜ける中で飲食店のごみを収集することになりますが、きつい臭いやごみの飛散の危険を横目にして差別的な視線を強く感じるがよくあります。飲食店などの重いごみを扱う際、腰を痛めることも頻繁にあり、私もつい先日ひどい腰痛になって今もコルセットをしています。ごみを取っていて区民の方から「ご苦労さま」などと声をかけられるととてもうれしいし、区の他の部署の職員からも「清掃はよくやっている」と評価されることも多くあります。自らは一番区民に接しているし「区政の顔だ」と誇りを持って自負しているところです。しかし千代田区は2000年の清掃事業の区移管以降清掃労働者を一人も採用しておらず、職員数は大幅に減るばかりです。最も若いのが33歳。37歳の自分は下から3番目です。職員構成はひどくいびつな状態。このままではとてもまともな区民サービスは提供できません。新規採用は私たちの切実な願いです。みなさんも日常生活の中でごみを出したりペットボトルを処理したりすることがあると思いますが、身近なところが分別やりサイクルに関心をもっていただき、やれるところから実践していただければ、環境問題やごみ問題にアプローチすることになるのではないのでしょうか。具体的な行動が意識を変えることにつながると思っています。私たちもごみ収集以外に取り組めることは何か、区民サービス向上を目指して新しい取り組みも行なっていこうと努力しています。

(4) Fさん(男性、練馬区練馬清掃事業所勤務)

清掃車の運転歴15年です。東京23区の清掃車は私たち公務員が乗る車が三割、残り七割は下請けの運転手さんが乗っています。車の運転手にあこがれていた自分は、高校卒業時に消防官を目指しましたが不合格。遊園地の乗り物オペレーターを経て、医薬品等の実験動物技師になりました。そこでは動物愛護団体の人々が「動物実験は虐待だ」と抗議に押し掛けてくる場面にも遭遇しました。化粧品や薬が人体に有害でないかを実験で調べる、大変やりがいのある仕事でしたが、化粧をした抗議の女性に「あなたの化粧品の安全性も確かめているんですよ」といくら説明しても聞いてもらえず、仕事を全否定された苦い経験もしています。これも清掃職場とつながる職業差別だと思います。給料が安すぎたために転職した運搬会社ではハードなため腰を痛め、ようやくたどり着いたのが東京都清掃局の運転業務でした。狭い路地での収集などではとても気を使うし、道路事情が悪い中で収集時間が遅れたりすると住民から苦情を言われることも良くあって苦勞します。でも小さな子どもたちは清掃車が大好きで、幼稚園児などは「ごみ収集車!ごみ収集車!」と手を振って追いかけて来るほどです。自分もヒーローになった気がしてとても気持ち良くなります。ところが小学生になると「汚いな!くさいな!」と露骨に鼻をつまんでくる子どももいますし、またおとなからは「くさいんだから何回もうちの前を通るんじゃないよ!」などと言われると悲しくなります。汚れ仕事であることは間違いありませんが私は誇りを持ってこの仕事をしています。

(5) Tさん(女性、東京23区清掃一部事務組合清掃技術訓練センター勤務)

私がこの仕事を選んだのは、離婚によって自分の生活環境が変化する20代のときに自分にとっては激動の時期を過ごしていたときでした。自分独りの手で子どもを育てていかなければならないという状況でした。そんなときに父が清掃の仕事をしていました。ちょうどそのときに男女雇用機会均等法のこともあって、女性でも男性と同じ仕事をしやすくなったということを聞きました。

清掃の仕事を選ぶとき、面接官には「この仕事はきついよ、汚いよ、つらいよ」と嫌な面ばかり聞かされました。でも、子どもを育てることが自分の根底にあったので、なんでもできると思ってこの仕事を選びました。仕事をしていると、ベンツに乗った怖いお兄さんが、収集車の後ろに来て、「邪魔だからどけ」と言うわけです。相棒の職員が肩を突き飛ばされました。私たちは公務員ですから、公務中にそういったことになれば公務執行妨害という罪名がつきます。私はとっさに「今の公務執行妨害だよ」と口に出してしまいました。そうしたら私のほうに向ってきて、何も言わずに顔を近づけ、唾を吐きました。このことについては警察にも報告し、その人はどうも別件でマークされていた人らしく車のナンバーなどからその人は捕まったと聞きました。

私が収集していたエリアの集積所に、片づけのためにいつも出てきて待っていてくれるおばあさんがいました。ある日、紙袋を渡されて、中身を見ると布製の巾着とポケットティッシュのカバーが入っていました。「今日はあなたにこれを使ってほしいと思って、渡したくて待っていたの」と…。このことを思い出すといまでも涙がでます。

先日たまたまテレビを見たときに流れていた言葉で「あなたは何のために働いているの?」という問いかけがありました。人の欲求というものは4つあって「人から愛されること、人から褒められること、人から頼りにされること、人から必要とされること」、このうち3つは仕事をすることで得られるということでした。私はこれを見て「なるほどなあ」と感心しました。

本音を言えば、働くことは生活のため。でもそれだけじゃなくて、働くことによって得られることってあると思うんです。みなさんも、これから社会に出て働くときに、この3つを頭に入れておいていただけるといいと思います。

6. 清掃労働者の話を聴いての学生の感想

清掃労働者の話をお聴きする前、先の調査のような意識状況であった学生たちは、話をうかがって多くのことを考え、感じるきっかけになったようである。以下は学生の感想である。

実はぼくの父も清掃の仕事をしている。でも今までそのことを一度もほかの人たちには言って来なかった。やっぱりどこかで「はずかしい仕事」という気持ちがあったからだとおもう。今回、清掃労働者の人たちから聞いたような話を、父は家ではしない。清掃の仕事をしている人たちがどんな思いで毎日仕事をしているのか、今回はじめて知った。ぼくは父が清掃の仕事をしていることは知っていても、その仕事がどれほど大事なもののなのか、どういう思いでしてきたのか知らなかった。ぼくは父の仕事を「はずかしい」と思ってきたことをほんとうにもうしわけないと思った。(4年男子)

本当に大変な仕事なんだなとしみじみ思います。小学生の頃、一度、清掃工場に見学に行ったことがあります。小さな窓からボイラーを眺めて、すごい勢いでゴミが燃えているのを見て、「わー、すごい!」と思ったのを覚えています。そのような子どもへの指導、取り組みも清掃事務所の仕事だったとは知りませんでした。地域の人々や環境問題と密接に関わる清掃という仕事から皆たくさんのことを学び成長して今に至っているのだと感じます。特に、Tさんの話からは得るものが多かったです。清掃作業に関わらずどのような仕事であっても「何のために仕事をするのか」という部分を理解していないと、長続きしないと思います。普段あまり目立たないゴミ収集や清掃工場の仕事は人から感謝される機会があまりないかもしれません。でも私たちが生活していくために働いて下さっている事にとても感謝の気持ちを持ちました。ゴミの分別、リユースをもっと心がけようと思います。

(3年女子)

当たり前のことだが清掃所で働く人の中にも色々な方がいるのだなあと思った。今回のこういう企画がなかったら、「ゴミを収集する人」という見方でしか結局はとらえられない。こういう企画を通してどういう人がどういう気持ちで働いているのかを知ることができるし、その人達が伝えたいこともしっかりと伝わると思う。そうすることで「ゴミを収集する人」から、例えば「Nさん」ととらえ

られるし、マナーの向上にもつながるのではないかと思う。「匿名性による意識のうすれ」が、自身の行動を無責任なものにしてしまうのだと思った。(4年男子)

お話をうかがい、清掃事業にいまだに根強い仕事の表向きしか見ていない差別がなされることの現実を知り、消費者本位に、「目の前からゴミが無くなればそれでいい」「ゴミを扱う施設は迷惑だから地元を作るな」と、生活に欠くことのできない職務に対してあまりに無知で都合の良い考えを周囲がもっているのだなと感じました。一方、日々の仕事に社会的使命感、誇りを持って過ごしていってしゃることがお話や眼差しから強く伝わってきました。そこに、社会システムの根底を支えているという信念がなければ続けていける仕事ではないと思います。私自身も非常に無知でした。(4年女子)

今回の清掃労働者の皆さんとの交流を通して一番良かったことは差別と向き合いながらも仕事に誇りを持って働いている方々に出会えたこと、そしてその方々が積極的に清掃労働の「仕事」、そこで働く「人」を伝えようとしていることがわかったことだ。私たちにとっては街では単に「ごみ収集の人」でしかなかった人がそれぞれどういう考え方で仕事をしているのかということ等を知れたことは本当に貴重な機会だったと思った。(4年女子)

7. 学生による清掃労働体験実習

清掃労働者との交流授業から学生は多くの問題提起をうけることになった。そうした中で受講生の2年生・女子学生から、清掃労働体験をしたいという申し出があった。そして清掃事務所との調整の結果、千代田区清掃事務所で、2010年7月27日、体験実習をさせていただけることになった。「社会文化運動論」受講生に参加希望を募ったところ、もう一人、4年生の女子学生から希望があり、当日は筆者と2名の女子学生が参加させていただくことになった。

当日は朝7時30分に千代田区清掃事務所集合した。体験者用の控室も用意していただき、作業着を借り、更衣室にてそれに着替えた。その後、職員の方から諸注意を受けた。当日は猛暑日になることが予想されたため、熱中症にならないよう水分補給をすることと気分が悪くなったらすぐに申し出ることということを再三注意された。

8時20分、収集作業に出発。可燃ごみの収集作業を体験させていただいた。筆者は大型車、学生2名はそれぞれ小型車に乗り込み、それぞれ別のコースの収集にあたった。2名の学生は1回目の収集は人通りの多い駅周辺を中心に回り、2回目、3回目はそれ以外のオフィス街、飲食店街等を回った。飲食店街のゴミは残飯など水分を多く含んだものが多い。また特に暑い夏場にはその臭いは苛烈を極める。筆者も経験したが、正直、吐き気をもよおすほどの異臭であった。筆者や学生は一日、「体験」すれば終わるが、職員の方々はこうした作業が毎日続くわけである。1名の学生は収集袋にはいった生ごみをパッカー車に放りこんだ際、生ごみの汚水をもろに体に浴びてしまったと言っていた。

午前中の作業を終えて帰所したのち、11時から少し早めの昼食をとった。その後、約1時間の休憩。体験者控室では横になることができなかったの、学生たちは机に突っ伏して15分程度仮眠をとっていた。かなり疲れた様子であった。13時、不燃ごみの積み替え中継施設である三崎作業所を見学させていただいた。飯田橋駅の近く、すぐ目の前には東京ドームもある。14時、飯田橋車庫見学。飯田橋車庫は千代田区内の収集車を全て収納できる大きさがあり、収集作業後の収集車の洗車も行っている。また収集車の点検・修理を専門に行う施設も併設している。清掃事務所にはどこにも、職員が作業後に使用するための入浴施設がある。この飯田橋車庫にも入浴施設がある。そしてこの飯田橋車庫の施設は都内でもめずらしく女子用の入浴室もある。2名の学生はこの施設を使わせていただいた。この女子用入浴施設を使用するのは、彼女たちが初めてだそうである。

15時、千代田区清掃事務所に戻り、職員の方から行政面より見た清掃労働について説明を受ける。その後、事務所長や職員の方々と懇談会をおこなった。職員の方々からは「職場がいつもより明るくなった」「改めて作業の安全性や効率性を考える契機になった」といったご意見があった一方、「女性には負担の大きい仕事だということがあらためて感じられた」といったご意見もあった。

この体験実習後、4年（当時）のOさんは以下のような感想を述べている。

私がこの清掃労働体験に参加した目的は、職業差別が行われてきた仕事に携わることで「無関心な他者から脱したい」という気持ちがあったからだ。実際に清掃労働体験を終えて一番に感じたことは、一緒に収集作業を行った職員の方々にも様々なタイプの人がいるということだ。どんな職業であっても様々なタイプの人がいることは当然である。しかし授業で講義を受けているうちに収集職員の方々を「差別されてきた人」というステレオタイプで勝手に捉えてしまっていた気がする。もちろん中にはそうした人もいるが、多くは他の職業と同じように仕事は仕事として割り切っている人だった。収集職員の方々も他の職業に従事する人たちと何ら変わりなく、誇りを持ち、悩みをもって働いていることがわかった。そのことによって、職員の方々が身近に感じられた。そのとき私は、「無関心な他者」ではなくなったような気がした。以上のことから、今回の体験では座学では得られないものを得られたと思う。このような体験の機会を学生のうちに経験しておくことは、物事を多角的に捉える上で欠かせないものだと考える。

また、2年生（当時）のYさんは以下のような御礼状を職員の方々に送っている。

先日は大変貴重な機会を設けていただき、ありがとうございました。

千代田区での清掃活動に実際に参加させて頂きましたが、思っていた以上に体力や気力、コツがいる仕事であると感じました。私につきましては、短時間で全くと言っていいほどお役に立てなかったのにも関わらず、滝のようにドッと出る汗と強い日差し、袋の中の刺激臭にやられ、作業を終えたあとにはヒリヒリする指先の痛みと凄まじい疲労、睡魔に襲われました（翌日には筋肉痛にもなりまし

た・・・)。

また、施設見学で特に印象に残ったのは船に積み上げられた「ゴミ」の山です。不燃物とのことでしたが、実際には可燃ゴミや資源ゴミが入り混じり何が何だかわからない状態でした。この光景をみて、「なぜこんなに適当に捨てるのか?」と、収集される方々のたいへんさを考えずに捨てる人々の心無さに大変悲しい思いがしました。

今回の体験全般を通して感じましたのは、「外から得られる情報」と「実際に体験して得た情報」は全然違うということです。炎天下の中、汗だくになって収集を終えたときの達成感、皆様方の優しい心遣いと安全に対する配慮、和気あいあいとした職場の雰囲気……。自ら現場に飛び込んで実際に清掃労働にたずさわらせていただいたことや、皆様方からお話をうかがい意見交換をできたことは、私の職業感や生活感など、様々な考え方に大きな影響をあたえました。

さて、この活動に参加させていただく前、私が身近な人に「今度、清掃労働の職業体験をさせてもらうんだ」と話したとき、友達からは「そうなの?偉いねえ」と言われたり、「エッ、すごいね」と驚いたような返事が返ってきたり、上京している姉や親戚にいたっては「なんでそれ(清掃労働)なの?」と問われ、とても複雑な気持ちになったことを覚えています。私の思いこみなのかも知りません。しかし、そのような気持ちになったのは、どれも「あなたは、やらなくていいようなことをわざわざしようとしている」といったようなニュアンスをふくんだ上で発せられたような気がしてならなかったからです。仮に、もし本当にそのような意味をふくんでいたのなら、これは問題であると思います。

授業でお話を聞かせて頂く機会が存在することもなく、また現地に赴いて皆様との関わることもなかったら、私もそのような言葉を発する立場にあったかもしれません。または、自分が先入観を持っていたり偏見に似たような目で清掃労働を見ていたりということにも気づかなかったかも知れません。そう考えると、“関わる”ということがいかに人に大きな変化を与えるものなのか、という“関わりを持つ”ことの必要性を強く感じました。

以上のことから、私は「体験する」ということをもっと推進するべきであると考えます。私は、この清掃労働の経験をとおして感じたことを、自分の身の回りの人々に伝えていこうと思っています。そしてゴミ問題や清掃労働の職業に対して目を向け、深く考えてもらうような機会を提供していけたらと強く思っております。また、今後よりいっそう、資源やものを大事に使う心と、きめ細やかな分別をしようという意識を大切にしていこうと考えております。

最後になりますが、素晴らしい機会を設けてくださった皆様に改めて感謝申し上げます。本当に、ありがとうございました。

まとめ

ここまで、清掃労働者との交流授業について紹介をしてきた。清掃労働者の方々と直接に会い、直にお話をうかがうことで、学生たちがそれまで持っていた「清掃労働者」の画一的なイメージを崩

し、清掃の仕事に就いている人々も多様であり、さまざまな思いや経験、人生をたどって来られたことを認識したものとおもわれる。それはどの職業でも同じなのである。しかし私たちは、職業によって人々をカテゴリー化し、職業によって人々の人格をも決めつける傾向がある。しかしそれは妥当なことではない、という認識を学生には持つきっかけとなったのではないかと考えられる。そうした一定の成果はあったものとおもう。

しかし一方、限界もうきほりになった。約250名の受講生に清掃労働体験を呼びかけて、それに応じたのが2名であったということがそれを象徴している。つまり、事前の意識調査の回答にもあった、「すばらしい仕事だとおもうが自分がしようとは思わない」ということである。労働者の方々に出会いお話をうかがい、それまでのステレオタイプは崩れたが、「それ止まり」に終わっているということである。それをどう変えていくのか、今後の課題といえる。

だがまた他方、今回の取り組みをとおして、たいへん大きなテーマもうかび上がってきた。交流授業の最後におこなわれた質疑応答で以下のようなやりとりがあった。

講演の中で清掃人権交流会会長のIさんが、「私たちはこうした差別をうける立場にありますが、誇りをもって、それを社会にアピールしていきたいとおもっています」と述べられた。この言葉についてある学生が、「Iさんはお話のなかで『被差別の立場だが誇りも持ち、それを社会にアピールしていきたい』と言われましたが、どのようにそれをアピールしていかれますか？」という質問をした。それに対してIさんが少し言葉に窮するという場面があった。

このIさんと学生のやりとりは大きなテーマがそこに投影されている。学生の質問の真意はこうである。つまり、『被差別』といういわばマイナスのポジショナリティを、どのようにしてプラスのそれに転換できるのか」ということである。そしてそれはつまり、「マイノリティ性＝社会的に差別をうける立場はアイデンティティとなりうるのか」ということでもある。

このテーマは、いわゆる「反差別」の思想や社会運動の中でも今なお現在進行形の問題であり明確な答えが出ていない問題であると言える。いや、答えの出ない問題なのかもしれない。多くの場合は、「被差別」の立場の人々が、それに抗して生きてきた姿、それとたたかってきた姿に「誇り」を見いだそうとする。それが現在の常設的な言説となっている。しかしこの言説には課題が残る。それは、「それでも差別意識や構造、劣位性は残り続ける」ということである。Iさんは学生の質問に対して、そうした常設的な切り返して回答することもできたとおもう。しかしIさんはご自分の言葉でそれに答えようとしていた。それがあの「言葉に窮する」というかたちで表れたと考えられる。

また、学生たちの感想文によく出てきた言葉として、「差別に負けないでがんばってほしいとおもいます」という表現があった。これも問題提起をふくむものがある。つまり、自らの、その職業に対する蔑視観はそのままにしながら、その蔑視をうける当の人々に「それにめげずにがんばってください」と「誇り」を求める、それは本末転倒ではないのか、ということである。なぜなら蔑視は、蔑視をうける人々ではなく、蔑視をする側の価値の問題であるからだ。特定の職業や特定の立場の人々が蔑視をうける状況・環境を変革する努力なしに、蔑視を向けられる人々にだけ「がんばり」や「誇

り」を求めるのは、自らの当事者性を棚に上げた姿勢といわざるをえない。おそらく清掃労働者の方々はそうした「励まし」が欲しくて学生に自らの体験を語ってくれたのではないであろう。私たちは彼らの語りから何をくみ取らなければならないのだろうか。それは「承認」ということではないかと考える。

「承認」は、自己の規準を他者に強制するのではなく、マイノリティの位置におかれる人々が自己の文脈で自己の規準によっておこなった自己理解と自己解釈にもとづき相手を理解する営みといえ、そしてそれは一方通行の、「承認をせよ」ものではなく、対話によって相互に相手を理解する「相互承認」ではないかと考えられる。清掃労働者の方々が「交流」という言葉に込めた意味は、そうしたところにあったのではないかと考えるのである。そしてそれはもしかしたら、そうした学生たちとの対話のなかから、労働者自らが「清掃労働者」という概念を再構築していこうとする営みであるのかもしれない。

【参考文献】

- チャールズ・テイラー他編著、佐々木毅他訳 1996『マルチカルチャリズム』岩波書店
チャールズ・テイラー 1996「多文化主義・承認・ヘーゲル」『思想』第865号 岩波書店：4-27
辻内鏡人 1994「多文化主義の思想的文脈—現代アメリカの政治文化」『思想』第843号 岩波書店：43-66
東京清掃労働組合 清掃人権交流会 2010『第12回東京清掃労働組合 清掃人権交流会総会報告集』
東京清掃労働組合 清掃人権交流会 2011『第13回東京清掃労働組合 清掃人権交流会総会報告集』
東京二十三区清掃一部事務組合 2011『清掃事業の歴史—東京ごみ処理の変遷』（デジタル版）
(<http://www.union.tokyo23-seisou.lg.jp/information/book274/index.html#page=1>)

【Abstract】

About Dignity and Recognition of the Occupational Minority People:
The Result and the Problem of the Interactive Class
between Cleaning Workers and University Students

Yasuki IZAWA

There is discrimination based on work in Japan. Cleaning workers have suffered from such discrimination. Even youths have such a sense of discrimination.

Therefore, I carried out an interactive program to correct job discrimination involving both university students and the cleaning workers of Tokyo. This paper reports the result and the problem found in the meeting.